

〔研究ノート〕

霊長類社会論再考

木 村 光 伸

名古屋学院大学名誉教授

要 旨

霊長類社会のあり方をめぐって、個々の種社会を実体として理解するとともに、社会を個体行動により形成された現象の全体として記述し、構造化するための道具立てとして、「個性」「社会性」「共同性」という三種の概念を提示する。それぞれの概念は独立に意味を持つものであるが、同時に、相互に他の概念を前提に構造化される。これらを議論するために、動物の世界における「社会」概念を定式化するとともに、従来の霊長類における「社会」の観念的な理解から解放された社会論へと接近していく理論の出発点とする。

キーワード：ニホンザル，社会，個性，社会性，共同性

A reconsideration of primate society and their social relations

Koshin KIMURA

Professor Emeritus
Nagoya Gakuin University

ニホンザル社会の構造を再考する前提

私は2023年秋に『サルはさよならを言わない―「共生」社会への視座』と題する、ふざけてはいないが学的厳密さを追求したものでもない、私自身の自伝めいた書籍を刊行した。その本に関して2024年3月に東京で小さな研究会（生態学史談話会）が開催されたので、そこで私なりの解説をし、また意見を申し述べたのであるけれども、時間的な制約もあって、十分に意を尽くすことが出来なかった。さらに、私が同書中のニホンザル論において主張した「個性性」から「社会性」をへて「共同性」に到る同種の社会的交渉のあり方を巡っては、いくつもの疑問が呈された。その点に関して、口頭の質疑のやり取りでは十分に意を尽くすことが出来ないと感じたので、同書の原文に即して、あらためてやや解説めいた小文を作成することとした。

先に述べた書物の中で私なりにまじめに取り組んだ課題の一つが、ニホンザルの個体がどのような論理によって群れと有機的な連携をもっているのかという視点であった。同書で記述したことの要旨は次のようなものである。

ニホンザルにおいては彼が属する固有の群れの中において、それぞれの個体が個体として自由に振舞い（個性性の発露）つつも、他のサルとの関係を深めていく。現実のサルにとっての「個の社会性」は「個体間の関係性」としてサルの群れの中で立ち現われてくる。たとえば、個体が個体として独り立ちするというプロセスでは、他者との関係を当事者自身が関知し、確認する必要がある。具体的な事例で言えば、（あかんぼうの母親からの）独立過程として重要なのが、従来常識的に論究されてきたような、集団の中心における「保護し―保護される」関係性ではなくて、「無視され、干渉され、時には敵対されるような環境」なのではないか、といった事柄である。もちろん彼らは、同種で同質の群れの中の個体たちであるから、初めからコミュニケーションが成立しないはずはないが、直ちにわかり合える関係でもない。そのような関係性を乗り越えられなければ、個体の確立は望めない。そこに個体間を繋ぐ「社会性」が具体的に見てとれるのだと思われる。さらに、「社会性」というものが種の集団において個体間を結びつけ、種を構造的実体として存在ならしめている生物的特性であると考え、その具体的な関係性から導出されるその種の生活史的特性として「共同性」という概念を用いたい、と考えたのである。

二つの社会論的思考

上記のような論理建てで、霊長類のいずれかの種について生態学的な思考をなすにあたって、私たちが考慮すべき最初のポイントは、①一つの種の観察から理解可能な当該種の社会的なあり方と、②それらを通曉して多数の種、属あるいは系統群の中に組織的構造として現出する社会的なあり方を峻別しなければならぬということである。このように話を始めると、またぞろ厄介なことに出くわさねばならない。それは「社会」あるいは「社会的なあり方」とはいったい何なのだ？という疑問にひとまず回答せねばならないということである。そしてその回答こそが本稿の最終的で本質的な解答であるのだ。

「社会」とは生物の「生活」のあり方であって、さらに言えば「生活」とは一つの種に属する個体が、個体として生き延びる手段・方法であるが、同時にそれは、一つの種に属する個体間に広がる数多の関わり（個体間の関係性）を表現する言葉でもある。生物の世界は非常に多くの種から構成される複雑極まりない世界であり、その部分世界である一つ一つの種こそが、それぞれの生活を通して多様性に満ちた生物界を作り上げている。近年になって通常のことばとなった「生物多様性」はそれを生物界の仕組みとして、あるいは科学的な構造として表現するものである。今西錦司が強調する「種社会」（1941, 1949）というのも、それを彼特有の論理（感性というべきか）によって実在化させたものであろう。

そもそも社会とは？

そもそも「社会」という人間の生活に基礎づけられた用語を、生物の生き方を構造的に論じる目的で使用することには、私自身もいささか躊躇する。そこで、生物学の世界とりわけ最近の進化生物学の分野では、「社会」という用語がどのような文脈において、どのような意味合いで登場するのかを見てみようと思い立った。たとえば最近読んだ書物の一つに「社会はどう進化するのか」（高橋洋訳, 2020）というのがある。これは進化生物学者のウィルソン David Sloan Wilson が2019年に上梓した *This View of Life: Completing the Darwinian Revolution* の全訳である。私は訳書の表題から見当をつけて本書にはひとまず「社会」という概念の理論的な説明があるに違いないと思ったのであるが、期待に反してそのようなものはどこにもなかった。それに代わって最初に登場するのは、「社会進化論 Social Darwinism」の否定である。要するに進化の総合説におけるダーウィン主義の位置付けからテイクオフして、進化生物学の現状を論じたうえで、現代社会の諸問題に論を進めるという形式のものであった。そのような議論においても、生物の「社会」は無定義かつ前提的に表現しうるものなのであろうか。あるいは生物科学としての「社会」の定義づけは必要ないのであろうか。私の書棚に並ぶ幾冊かの「現代進化論」や「進化生物学」の名著を端から順に眺め渡してみても、「社会」の理論的な解説にお目にかかることは出来なかった。そういえば、エソロジーのローレンツ（1960, 1963）にしてもティンバーゲン（1953）にしても、はたまたアイブル・アイベスフェルト（1974）でも、彼らのたくさんの優れた著書はすべて動物の具体的な行動の記述によって構成されており、それらの行動が支える彼らの「社会」そのものは、それらの行動によって顕現する全体像として記述されているのである。つまり「社会」そのものは行動する動物にとって既定の生きざま、あるいはそのような場として理解されていたのである。なんということか。「社会」を用語解説として説明することは生物研究においては、無用とは言わないけれども、研究上エッセンシャルな事柄ではなかったのだ。動物の「社会」はそれぞれの種がもつ生活上の振舞いによって定義づけられるべきであったのだ（あるいは生活上の振舞いによってしか定義づけられない）と言えようか。

もう一つ驚いたことに、私たち日本における霊長類生態研究の出発点となった伊谷純一郎の『霊長類の社会構造』（1972）においても、「社会構造」はあっても「社会」そのものを原理的に説明することはなく、それは伊谷の社会構造論に理論的批判を続けた水原洋城においても同様であった。水原

の最初の著書である『日本ザル—このみごとな社会構造』(1957)もまた、「社会」を動物の生き方の前提的な様態として記述しており、「社会」の概念的な説明なしに、たとえば「社会生活(それを形態的にとらえれば社会構造)」といった表現をしているのである。彼もまた、「社会」を生物学の用語として定義づけることはなかった。もっとも彼は同書で述べたニホンザルの社会構造論の内容を自己批判的に再考(1971)したうえで、本来は彼の学位論文となるはずであった著作「高崎山におけるニホンザル自然社会のステータス構造—ステータス概念再検討のために—」(1965)を、自己批判的付言を付して『ニホンザル行動論ノート』(1981)に掲載し、それまでの彼の社会構造論をほぼ全面的に否定した。そのうえで彼は「群れという集団の形成を通じての社会と個体との関係をどう捉えるか、可視的実在でない社会を実体と見たとき、可視的実在であり要素としての実体である個体どうしのあいだに成立する諸々の関係性をそれとどう対置させ位置づけるか」という問題意識に行き当たったのである。だから水原には「社会」とは何かというなにがしかの着想はあったに違いない。おそらくこの辺りに私の「個性」「社会性」「共同性」の論議に連なるものがあったのだろうと思う。

伊谷にも水原にも「社会」を自然科学的に用語解説する背景がなかったということは、ひょっとすると生態学的分野における「社会」概念は、社会科学からの単純な借りものにすぎなかったということなのだろうか。もう少し動物生態学の背景に関する日本人による文献を渉猟してみよう。今西錦司は『生物の世界』(1941)において、全5章の内の1章を割いて「社会について」という小題で論じている。その中で彼は「社会という場合にはひととはしばしば集団現象を連想するが、広義に解した社会というのは(中略)、その中でその社会の構成員が生活する一つの共同体的な生活の場である」と述べている。さらに彼は言う。「社会現象としてわれわれに認められる個体相互間の関係が、空間的に集結しているかそれとも疎開しているかということは、現象学的に社会の類型を別つ特徴とはなっても、それ自身によって社会であるや否やを決定すべき準拠とはなり難いものである」とも論じているのである。結論から言えば、「社会」を語る今西の論点は、その議論の先に「種社会」から「同位社会」、さらには「同位複合社会」を展望するものであったから、この先の議論と私の論点とが収斂するわけではない。しかし今西もまた、動物の可視的で具体的な集合状態としての群れであったり、個体の分散する様態であったりとしての生き方の全体を「社会」とは呼ばなかったのである。彼の「社会」はあくまでも「一つの共同体的な生活の場」である。『生物の世界』の今西の主張は、『生物社会の論理』(1949)に到ってさらに明確となる。そこでは「生物的自然における具体的な種のあり方は、歴史的であるとともに社会的であった。種とは、すなわち、同じ生活形をとる個体から成り立った、一つの社会である、あるいは生活形社会である」というのが今西の主張であった。さらに彼は「生態学という共同体と、社会学という社会とは、同じ生物的自然を対象としながら、その対象の扱い方がちがう」と述べている。続けて、それは「生物的自然の分類と分析との違いである」とも言う。「共同体とは分類されたが、社会としては分析のすすめられていない生物的自然である。生物的自然とはそれゆえ、社会学的立場からいえば、一つの生物全体社会であり、分析によって取り出された社会は、この全体社会の部分社会である」ということになる。今西はそこに生態学と社会学の違いをはっきりと認めていたのである。だから彼は集団生活をするものに社会を認めるといった理解は過ちであると考えており、もっと一般的な、包括的な社会をイメージしていたのだと考えられる。そして、その中

には同種の個体のすべてがはいっている。

(その種の個体が) 集団的な生活をしていようと、単独的な生活をしていようと、それはどちらでもよい。それをもって社会生活かどうかの準拠にしようというのではないから、集団生活をしようと単独生活をしようと、それはすでに社会内の問題であり、一つの社会の組織の問題であって、いずれにしても、社会が維持されてゆく以上、その社会に属する個体は一たとえわれわれの眼に、そのようにはうつらなくとも一立派に社会生活をしているものと考えるべきである。

(今西, 1949)

私がここで論じたい「社会」と今西が記述している「社会」はどのように違っているのだろうか。今西は、生物種が具体的な場に存在している状態を生態学的に「共同体」という概念で分類したが、さらに社会学的概念で「社会」として分析しなければならないと考えていた。そして、当該種が具体的にどのような生活のスタイルをとっているかということについては、すでに種の内部の問題であり、しかもそれはその種の「社会内」の問題なのだと断じているのである。

今西は彼の「種社会」を前提として話を進めているのだ。これまで私は、ニホンザルの群れそれ自体を一つの「社会」として定義付けようとしてきたのであるが、それは今西が言う「生物種が具体的な場に存在している状態」(生態学的に定義された「共同体」)つまり私たちが日常的に見ることが出来る「サルの群れ」のありようなのではないか。「サルの群れのありよう」はそれ自体が社会学的に定義される「社会」そのものなのではないのだろうか。

かつて、というか、最初期のニホンザルの野外研究においては、社会構造というものを集団内の個体の配置と捉えて記述していた。その最たるものが二重同心円構造と呼ばれたものである(図1参照)。



図1. ニホンザルはボスを中心に優位なオスザルの集団配置とそれに随伴し、その外側に広がるメスたちとその子供たちの集団として群れが構成されていると考えられてきた。それを二重同心円構造と称したのである(写真は河合雅雄『ニホンザルの生態』p. 44より借用)。

図では、幸島の砂浜に撒かれた小麦をめぐる、幸島のサルたちが餌を求めて展開している（河合、1969）。同心円の中心にはいわゆるボスザル（アルファ・オス）が居座り、その近傍には優位な（いわゆる順位の高い中心部の）メスザルとその子どもたちが餌を拾っている。そこから外周に離れた位置に、ボスザルや優位なメス家族には接近できない他のサル（それを周辺部のサルなどということもある）がわずかな小麦を拾って食べている。これを初期のサル学者たちは順位制社会（の社会構造）などと呼んでいたのである。

このような理解の仕方は、現在ではほぼ姿を消したようにも見えるけれども、霊長類の多様な社会生活を記述する際に、しばしば無自覚に頭をもたげてくる。今西が述べた「種の社会内の問題」というのは決してこのようなことではなかったと、私は考えているのだけれど、はたして現在の霊長類学の専門家たちはどのように見るだろうか。単に昔の問題だとは言えないと思うのだが。余談ながら、因みに『生物社会の論理』が刊行された1949年は私が誕生した年であって、それから70数余年を経て、私の論理を考察するに際して、過去50数年にわたって、いつも同書を俎上に載せることが出来たことは、自然を科学するものにとって、まことに感慨深いものがある。

今西の古い思考を発掘したついでに、彼の盟友であった可児藤吉の考えを探っておこう。第二次世界大戦の終末も近くなって戦死という不幸をもってその科学者生命を閉じざるを得なかった可児は、その短い生涯において自らを生態学の徒と称していたのだが、その著作はあまりにも少なく、彼の生態学的思考を知る手掛かりは乏しい。そんな中で、彼が戦地に赴く前の1943年に徳田御稔に個人的に生態学を講じたものを、徳田がノートとして起こし、1961年に個人印刷物としたものが残っている。「生態学ノート」と表題がつけられたわずか14ページの小冊子（謄写版）に、可児の「社会」観を示す部分がわずかながら認められる。彼は次のように言っている。

結局のところ生態学の対象は、生物の集団生活つまり集団しているということを対象にする。

トリが池にいる場合には、“群”を形成している。（中略）群は群として移動をおこなったりする。

群が互いになわばりを持つことがある。もっと進んだ段階では群と群との間に交通が開ける。この例には人間がある。次に群の内部構造を考えると、個体の役割が相違するのに気づく。

ガンのあるものには先行者となり、サルにも役割のちがうものがある。人間では役割がひじょうに分化している（アリのばあいは形態変化をとまなっている）、このようになったものを“社会”と呼ぶ。

以上のすべては、空間すなわちすみ場所を個体群がどのように分布するか、集合aggregationのありかた、つまり個体群密度population densityの形態についてのべた。しかしじつはこの上に生活資料の得方を考えないと、実生活に触れたことにならない。

（以上は、可児藤吉、1943の私的な生態学講義による：『生態学ノート』1961）

可児はすでに種における集団の内部構造を考えて、「群」の中の個体に役割があることに気づき、役割の分化をもって「社会」の存在を定義づけたのである。

社会学に見る「社会」

それではそろそろ社会学における定義を考えてみることにしよう。社会学者の富永健一（2003）によれば、「社会Society」は、「ある共通項によってくくられ、他から区別される人々の集まり」であるとされる。それはまた「仲間意識をもって、みずからを他と区別する人々の集まり」でもある。社会の範囲は非常に幅広く、単一の組織や結社などの部分社会から国民を包括する全体社会までさまざまである。社会は広範かつ複雑な現象であるが、継続的な意思疎通と相互行為が行われ、かつそれらがある程度の度合いで秩序化（この現象を社会統制と呼ぶ）、組織化された、ある一定の人間の集合があれば、それは社会であると考えることが出来る。そのような概念を動物の生態一般に拡張したのが、私たちが「社会」と呼ぶテクニカルタームなのだ、とひとまず了解しておこう。



図2. ニホンザルの群れ。左からオトナオス、オトナメス、こども、あかんぼうの集団。中の写真は毛づくろいする2個体。右は大きな群れの外側で見るともなくサルたちを見ている高齢のメスザル。群れの個体はすべてなんらかの個体的な位置にいる。それはオス、メスであり、おとな、こどもであり、個体間の関係においてさまざまな相互的な関わり合いを持つものたちである。可児藤吉は種の個体におけるこのような存在の仕方を「社会」と考えていたと思われる。（写真 木村）

「個性性」と「社会性」、その先に「共同性」を見る

これまでの検証において「社会」という概念が動物においても使用可能であるという結論に達したのかどうかは定かではない。しかし、動物がその行動のありようを基礎としつつ、「社会的存在」として生きていることは明らかだと言ってよいだろう。以下の議論では、彼らの行動を通して、個体とそれを取り巻く他者との関係を見つめなおし、そこから「個性性」に基礎づけられた「社会」のあり方、個体相互間で展開される「社会性」の実体、そのような関係性を安定的に成立させている個体および社会相互の関係としての「共同性」の様態を明示することにした。なお、この間の議論はすでに前著『サルはさよならを言わない』で展開していたが、冒頭で述べた研究会においても私の趣旨を十分に理解されなかったという点もあった。そこで、ここ以降の議論においては、同書で記述した内容を振り返りながら、原文のまま、あるいは抽象して、引用・利用することで、与えられた疑問を再考

する契機となし、先の著書において賛同が得られなかった諸点を前書の原文に即して再読し、説明することを許されたい。

私は、ニホンザルなどの集団（群れ）で生活しているサルに見られる個体間の関係の中から、彼らが生活の基盤として持っている「共同性」を、生活上最重要な関係性と理解してきた。それは、単に一緒にいるとか、一緒に何かの所作をするといった生活特徴以上の何かを示している。およそ50年にわたって、私は日本と中南米各地でさまざまな種のサルたちを観察してきたが、次のような疑問を解決出来ずにいる。すなわち、ニホンザルが纏まった集団としての群れの中で一緒に暮らしているということと、コロンビアの熱帯林の中で見たクモザルのように日周活動の中で生起する一時的な離合集散といわれる現象を伴いながら結果として一つの群れを形成しているということとの間には、どんな違いがあるのだろうか。共通して言えるのは、どちらもその集団を構成する大半の個体が、互いに互いを認知しているということだろう。しかし「共同性」の根底にあるのは、そのような「知り合っている」という即物的な繋がりだけではなくて、相互認知を前提とした集団特有の「関わり合い方」に対する全個体が示す主体的傾向なのである。関わり合うことを通して、容易には解体することのできない関係性を成立させると言ってもよいかも知れない。そのような強固な関係性があるからこそ、その集団において「私」と「あなた」は代替性を持つことができるのだ。「共同性」に裏打ちされた集団の中では、一つ一つの個体がかけがえのない存在であると同時に社会的役割において相互に代替することができるという関係にあるのだ。このような関係性はもちろん単独生活者においては存在しない。

サルの場合にはトランスジェンダーということは考えないでおきたい、と私は思うので、サル社会を構成するのはそれぞれオス、メスの個体であるとしておく。単独生活者のサルを除けば、サルの群れ社会は複数あるいは多数の個体から成り立っているわけだが、個々のサルが持つ彼ら独特の生活スタイルの中に独自の個性が認められる。一匹ずつの個性と言ってもよいかも知れない。ニホンザルの群れに象徴的に認められるような動物集団のあり方は、それぞれにユニークな個性の持ち主からなる集まりであるがゆえの現象なのである。それこそが「個性性をベースに見た社会性」の捉え方であろう。群れの中に優劣の関係が成り立つのも、見かけ上、個体相互の好き嫌いがあるように見えるのも、母子の関係と言ってもそれぞれに接し方が微妙に違っているのも、さらにはオス・メス間の性的・非性的な諸関係も、その個体関係を成り立たせている者たちの個性を背景としているのだ。それらを総称して「個性性をベースに見た社会性」あるいは「個性性に基礎づけられた社会性」と、私は言っているのである。ここでいう個性性は先述の「私」や「あなた」そのものであり、社会的な諸関係を作り出す源泉である。つまり、そのようなユニークな「個性性」があるからこそ、それらを相互に関係づけるこれまたユニークな関係としての「社会性」があり、それゆえに、有機的な社会的諸関係を纏め上げる「共同性」がそれぞれの場において現出するのである。

「共同性」は個体からなる全体的構造を支える社会的紐帯の根幹であるのだから、少なくともサルたちの集団にあっては、それを支える社会構造そのものであると言ってもよいかも知れない。だとしたらこの「共同性」は単に個々のサルたちの「個性性」だけを支えにしているわけでもなさそうであ

る。「共同性」は「社会性」を基礎として意味づけられ、その「社会性」は個々のサルたちの「個性」が相互作用として形成するものである。そのうえでさらに、私が言っておきたいのは、「共同性」から発せられる各個体への一種の制約（「個性」のあり方に対する制限）のようなものがあるということなのだ。「共同性」は個体間の行動的調整で支えられ、まさに社会的な関係性の別の評価なのであり、そこで思い出してほしいことは、社会関係というのは、その根本において、相互に影響し合うということを前提として構造的なのだとということである。だから「個性」なしの「社会性」はなく、「社会性」なしの「共同性」もまた成立しない。同時にその正反対の関係性も存在している。「個性」から「共同性」へ、同時に「共同性」から「個性へ」という志向の流れが双方向に成立しているということこそ、社会の存在様式として重要なのである。その存在様式の全体を、私は、種に属する個体の「共同性」に支えられている実体としての「社会」と呼びたい。ここまで述べてきたような個体と集団を繋ぐ関係の連鎖は、決して物理的諸関係に終始するものではない。むしろ「個性」を認識し、その社会的意味を理解し、それらを通じて人間を含めた動物集団の持つ「共同性」の概念把握に到る道筋をもって、私たちは地球上に構築された自然の動的構造に迫ることができるのである。自然界はその構成員の単なる配列ではなく、それぞれが持つ个性的存在様式のダイナミックな諸関係なのである。少々先走って人間社会に敷衍すれば、現代社会はそのような諸関係を自らの生存基盤と考えて、共生社会と名付けたのである。

（ここまで、木村，2013を一部改稿）

社会性は個性の発露

ニホンザルは私が見てきたサル類のなかでも際立って個体関係が密接であるように思われる。だから、そこで見たサルの印象だけをもって、サル類における「社会性」というものを強調することは、やや依怙臆屈、あるいはともすれば臆屈の引き倒しともなりかねない。そこでより客観性を担保するために、ニホンザルと近縁のサルたちを引き合いに出しておきたい。

ニホンザルの近縁種はマカカ属 Genus *Macaca* という分類群に含まれ、その大半の種はアジアに生息し、一部はアフリカに分布している。私たちに比較的なじみが深いのは、台湾のタイワンザル、東南アジア諸島のカニクイザル、インドおよび周辺に広く生息するアカゲザルなどであるが、アカゲザルは第二次世界大戦中にアメリカ合衆国の医学・実験科学の政策に沿って、アメリカの属州であるカリブ海のプエルトリコに連れてこられて、カヨ・サンチャゴ島に放飼された。戦後の紆余曲折を経て、最近のカヨ・サンチャゴ島のアカゲザルたちは、北米のみならず、世界中の医学・心理学・行動学などの研究者・学生の実験および行動観察の対象として注目されている（木村，2010）。

カヨ・サンチャゴ島におけるアカゲザルの観察から、私たちが学ぶことは何か。第二次世界大戦以前にインド各地で捕獲され、アメリカに移入されたたくさんのアカゲザルは、放飼され、比較的自由に群れを構成していったのだが、現在では私たちが日本の野猿公苑や各所の放飼場で見るような群れと同様の集団として定着している。彼らはまた、さまざまな心理学や基礎医学の実験材料として、群れから離されて強制的な環境に過ごさねばならない時がある。群れから離された個体はどのような心

的狀態で過ごすのだろうか。また、実験のための隔離から解放されて放飼場へ戻されるときには、群れの他個体とどのような（新たな）関係性を築くのであろうか。そのことを考察するために、全体的な状況を思い起こしてみたい。そもそも放飼場で生活する一群のサルたちは、個々のサルそれぞれの経験としてどのような状態にあるのか。各自の社会的経験は群れ（の個体のなかでの関係性）として、どのように認識され、維持されているか。たくさんの疑問が出てくることだろう（木村，2010：2023）。

放飼場で一つの群れとして生活しているサルたちは、いわば顔見知りの存在であるが、それがどのような顔見知りなのかということはあまり議論されたことがない。一つの事例を見てみよう。そのような放飼場の生活者である一頭の若いオスザルが実験のために捕獲され、麻酔されて、他の仲間とは異なった環境に置かれた。どうやら時間はごく短時間であったようだ。しかし麻酔から完全に覚醒しないままに放飼場に戻されたその個体は、自分の置かれた立場を十分に理解していなかった。群れのサルたちも最初は従前から慣れた仲間のサルとして大して気にもしていなかったのだが、戻ってきたサルは歩行もおぼつかなく、他のサルとの接近・近接、遊び仲間のちょっとした身体的ちょっかいに対する反応などが、それまでとは少々異なっていた。すべて未覚醒の麻酔の所為なのだが、彼自身はその異変にすら気がついていなかったのだと思われる。本人は気がつかないままなのだが、他のサルたちは違った。いつものような反応をしない彼に対して、普段はしないような乱暴なやり取りの末に、多くのサルが、彼を今までの仲間とは違う存在だと理解し、未知の他者、あるいは敵対者にとるような態度、行動をし始めたのである。標的にされた若いオスザルに危険が及ぶのを見た研究者たちが、彼を放飼場の外へ連れ出さなかったら、彼は殺されていたかも知れなかった。ところが、その後、十分に覚醒した若いオスザルはもう一度群れに戻されると、他のサルたちに対していつものように振舞って、追いかけられれば逆に振り向いてそれらを追い、メスたちに悲鳴を上げられればうまく逃げ、他の仲間との関係をそれまでの自由なやり取りと同じようにこなし、集団の一員としてうまく立ちまわることが出来たのである。そして他のサルたちもそれ以上彼を特殊視することはなくなった。この観察事例から、私たちは重要な示唆を得ることが出来るだろう。すなわち、アカゲザルの観察で詳らになったことを総括すれば、①アカゲザルが仲間の存在を十分に認識していること、およびそのような認識が直ちに攻撃の抑制には必ずしも普遍的効果をもつものではないこと、②仲間というものは常に他者との間で了解可能な社会的なシグナルを発信し続けることで関係を維持することが出来るということが明らかになったのである。それぞれのサルが自己の性向あるいは主体的な行動として自らを主張するつまり個性的なという意味において「個性性」を発揮することは、そのまま周囲のサルたちに対して社会的に振舞うということであり、それはそのまま自己と他者との関係において「社会性」として捉えられる諸関係を意味するのである。

アカゲザルとニホンザルは同属の異種である。同属であるということで、彼らの振舞い方が似ているということはよく理解できる。しかし確実に違いが存在していることもまた理解しなければならないだろう。それは、それぞれの種の集団内における社会的対応の相違が進化史の中で適応というプロセスを通して、それぞれの種に固有の「社会性」を形成しているということだ。具体的には、個体の行動のあり方および他者の表出や行動に対する反応の仕方が異なる（かも知れない）ということであ

る。

同属異種という生活形が比較的良好に似たサル同士を比較するのは、実際によく似た「社会」を見ているのだということで納得できる（実際にはそうでなくても）。しかし系統や分布が大きく異なるサルを比較すると、比較の基準そのもので困惑することが少なくない。そこで私の知るサルたちの中で広鼻猿類（新世界ザル）を取り上げてみたい。

新世界ザルの中でもクモザルは比較的大きな体形のサルである。当然その群れは他の比較的小さなサルたちの群れと比較してかなり大きな広がりを持つことになるだろう。そうすると彼らの採食に適した果実が広範に分布していない限り、すんなりと食にありつける者とそうでない者とが群れの中に生じてしまう。それは群れという「社会」のあり方としては不都合な事態と言わねばならない。群れの個体サイズは食の分布サイズと整合的なものである必要があるだろう。それこそがクモザルが、頻繁に離合集散するという特異な「社会」のあり方を示して、比較的小さなサブグループを持つ理由の一つである。生きやすい「個体」のあり方と、その延長として「集団内の出会い方」を調整するような随意的な離合集散という「社会的出会い」を生活上の工夫として生きている。「個体」と「社会」との連関を、行動を通して実現しているのだ。それでは、群れ全体の個体数を小さくしておけばよいではないか、ということも考えられる。しかしそこには群れの集団としての力の大きさが関係してくる。自分たちの専有的な遊動域を確保して、とくに他集団のクモザルたちとやや対立的に生活していくためには、ある程度の個体数、とくにオスザルたちの存在は欠かせないだろう。しかもそのオスたちはメスにとって、とりわけ育児中のメスにとっては、時として敵対的な行動にさらされる存在でもあり得る。そのような状況が、群れ全体を大きくしつつも仲間と出会わない機会を多く作るという生活上の必然性を創出するのであろう。大きな群れでありながら、その時々の場合に合わせた小集団で生活できるという離合集散する「社会」のあり方は、彼らにとって都合の良い仕組みなのだ。このような要求が群れを分かたせるとすれば、分かれることにおける主体は分かちようとするサルたち自身にある。他のサルたちにとっての都合の良し悪しはここでは考慮の対象外であろう。次の出会いがいつであろうとも、今「さよなら」するのはそのサル自身の問題なのだ。そのような状況を、クモザルが社会的に作り上げたクモザル独自の「共同性」の姿だと言ってよいのではないかな。

（木村，2013を一部改稿）

行動指標としてのシグナル

ニホンザルの個体発生をつぶさに観察していると、さまざまな行動要素が異なった行動的文脈の中で利用されていることがわかる。それはまさに『精神の生態学』の中でベイトソン G. Bateson が述べていることと符合する。ここ以降も『サルはさよならを言わない』で記述したことをもとに論じていくこととする。

人類学者であり、精神医学（精神療法）でサイバネティックスの領域に深い関心を示したベイトソンは、遊びという行為に関して、次のように述べている。

私が動物園で目にしたこと、それは誰にも見慣れた光景だった。子ザルが二匹じゃれて遊んでいた——二匹の間で交わされる個々の行為やシグナルが、闘いの中で交わされるものに似て非なる、そういう相互作用を行っていた——のである。このシーケンスが全体として闘いでないということは、人間の観察者にも確実に知れたし、当のサルにとってそれが「闘いならざる」なにかだということも、人間観察者に確実に知れた。この「遊び」という現象は、ある程度のメタ・コミュニケーションをこなすことができる動物に限って現れる、つまり「これは遊びだ」というメッセージを交換できない動物には起こりえない、現象である。

(佐藤良明訳『精神の生態学』1990)

ベイトソンが言わんとしたことを私は次のように理解した(木村, 2013)。遊びという行為の持つコミュニケーティブな側面であったが、彼はもう一つの問題に気づいていた。それは「遊び」という現象において二個体間で交わされる個々の行為やシグナルが、「闘い」の中で交わされるものに「似て」「非なる」ものである、ということであった。動物において「メタ・コミュニケーションをこなすことができる」ということは、すなわち、個々の動作や行動要素の組み合わせを通して、しかも同じ要素をいくつかの文脈において使用することで、他者との間で「これは遊びだ」とか「これは○○だ」といったメッセージを交換するということであるというのである。このようなことが可能なのは、当該の動物種が進化の結果として、他者のシグナルに対する機械的な反応としての行動から、明らかに意図的で選択的なシグナルの読み取りを行えるようになったということの意味している。ベイトソンはそれを次のように表現した(木村, 2013)。

コミュニケーションの進化を考えてみると、生物が他者の発する「ムード・サイン」に“機械的”に反応するレベルを徐々に抜けて、その徴し(サイン)を指示記号(シグナル)として認識できるようになる段階が決定的に重要だということは明らかである。つまり、他の個体(あるいは自分自身)の発するシグナルがただのシグナルにすぎないものであり、信じることも、信じないことも、ウソになることも、否定されることも、強められることも、修正されることもすべて可能だという認識が発生する段階である。

(『精神の生態学』)

彼は動物の観察を通して行動というものを理解する方法を学んだのである。加えて言うならば、彼はサルたちの二者間の行動のやり取りを見て、個体が個体としてふるまうこと以上に、他者との関係性の構築を意図的になしていることに驚かされたのである。「個性性」に基礎づけられた行動は、他者との関係を構築するという行為を通して「社会性」を獲得するのである。ベイトソンが看破したように、「遊び」と「闘い」という感情的に、また、それをつかさどる生理的背景も異なった状況で生起する行動の中に、「似て非なる」ものとして行動要素が登場するということは、私たちの観察が示唆することと一致するものであり、メタ・コミュニケーションといわれる能力を持つ動物には共通するものであると同時に、もちろん人間の発達過程における学習が生み出す諸行動においても顕著な

である。ベイトソンは「似て非なる」と言ったけれど、それは「非なる」ものなのではなくて「同じものが要素として含まれているにもかかわらず、異なった文脈を示す」ということなのだ。ニホンザルの行動研究においてわかったことの一つは、コミュニケーションというものが具体的な外的情報と、それを受けて生起する感情、さらにはそのような関係を通して発現する行動の連鎖が一对一对应的に進行するのではなくて、情報の受容から始まる行動のいくつかの要素の組み合わせとその背景となる伝達の送り手と受け手の間の状況の違いを手がかりに、多彩な解釈を含むものとして了解されていくということであった。さらに、そこで重要なこととしては、そのような能力が発達過程において社会的経験との関連において積み上げられていく、ということなのである。ニホンザルの未成熟個体はそうのように発達し、成熟していくのである。「社会性」の獲得とその先に見え隠れする「共同性」はそのようなプロセスと結果としての諸関係を意味している。そういえば、あんなに活発かつ多様に遊んでいたニホンザルのあかんぼうが性成熟に達して、複雑で緊張を強いられる成熟したサルになるにつれて、少しも遊ばなくなるという事実は、このようなメタ・コミュニケーションによって支えられた伝達系が、より直接的な社会的関係つまり優劣や家系の認識などに置き換わっていくことを示しているのではないか。

心理学者のバウアー Bower もまた、社会的に意味のある行動とそこに現れる行動要素との関係を重要視して、次のように述べている。

大部分の心理学者は、次のような特徴をもった発達という概念を用いて仕事をしています。発達は累積的な過程であり、後の行動はそれに先立つ行動変化にもとづく過程であると見られます。より複雑な行動は、より単純な行動に、そして「高次な」心理学的機能は、「低次な」心理学的機能の上に成り立つことになります。

心理学的には、発達は抽象的 (abstract) から特定の (specific) へと進むと、私は提案します。

(以上 Bower 1976：バウアー・岡本夏木ほか訳1984)



図3. ニホンザルの尾は口ほどにものをいう。周りのサルたちよりも優位なオスが尾をうんとそらせて自己の存在を主張しているのである。(写真 木村)

バウアーの指摘は、ニホンザルの初期発達を観察した私自身の経験ともきわめてよくフィットしている。ここでも「個性性」の即時的な表出から「社会性」の基礎に連なるいわゆる社会的行動が析出してくるけれど、それはあかんぼうに順序正しく現れてきた行動要素というより、ややランダムに見えつつ一挙に表出されてきた行動要素が、他者と向き合うに際して、社会的に意味のある行動あるいはあえて言えばサインとして形成されるのである。そこにはすでに他者を個別に認識するといった認知的な行動が含まれていることには注目しておく必要があるだろう。

人間社会における「共同性」は個体の他者認知を前提とする。ニホンザルの場合にはどうだろうか。霊長類全般を考えてみても、単独生活者である原猿類などをも含めて、おそらくすべてのサル類には他者認知の能力があるように見える。この場合には、それは自己認知能力でもあるだろう。自己を確立するということを、私たちは何やらとてつもなく高度な行為のように考えがちだが、それは動物に備わった本質であり、しかし、霊長類にはとくに他者との社会的な関係において、そのことが重要視されるのである。それは霊長類の集団の作られ方に関係することなのだろう。サルの社会を研究する者の大半は、「社会」というものを個体の相互的な関係の全体として捉えている。それは誤ってはいないのだが、本当にここで問題となるのは相互的とは何かということなのかも知れない。相互的とは二者（あるいはそれ以上）がそれぞれの相手に対して主観的に関係性をとり結ぶことであり、そのような「相互性」の先にこそ本来の意味における「共同性」があるのだろう。

はじめに行動ありき

このようなコミュニケーションの進化の段階に、果たして霊長類は全体としてあるのだろうか、というのが私の問題提起である。「シグナルはシグナルにすぎない」という認識は、ヒトの場合ですら完全でないことは明らかである、とベイトソンは考える。ヒトは意図を持って発せられたシグナルに操作されるのだ。それに対して、ヒト以外の哺乳動物は、たとえば「異性の発する匂いによって自動的に興奮してしまうのが常だが、その徴しが非意図的に分泌されたもの—すなわち、ここでムードと呼ぶ内的生理現象の一部が外部に知覚されるべく現われ出たもの—である以上、そうした機械的反応は理にかなったものである」とベイトソンは考えている。このような生理的で機械的な反応とそれによって生起させられる行動は、たしかに「機械的」であると同時に、あるいは「機械的」であるがゆえに「理にかなったもの」だけれども、それ自体がヒトと比べて「より原始的」な反応であるというわけではない。しかし、ベイトソンはそこを進化上の決定的なポイントだと考えている（木村，2013）。この嗅覚信号の例は、コミュニケーションの進化における決定的な一步を示してくれる。知恵の実を口にした生物が、シグナルをシグナルにすぎないものとして認識するに到ったとき、進化のドラマは急展開を見せることになったのである。それは（人間の言語がそうであるような）恣意的コミュニケーション・システムの道が開けたということだけではない。感情移入empathy, 同一視identification, 投射projection等、さまざまな要素が発生し、それらが複雑に絡まった多重の抽象レベルでのコミュニケーションの可能性が切り開かれたということである（『精神の生態学』）。

さて、それではベイトソンが考えるように、知恵の実を口にした生物としてのヒトに到ってはじめ

て、生物は多重の抽象レベルのコミュニケーションを得たのであろうか、あるいはそのときようやくそれらを必要とするようになったのであろうか。そもそも生物個体の二者間における関係性は、出会いの際に生起するさまざまな心的状況の投影である。だとしたら、ニホンザルの行動の発達過程が示す社会関係のありようもまた、霊長類各種の社会性を考える際の進化的プロセスを垣間見せてくれるのではないだろうか。

私が霊長類の観察を通して理解した彼らの「社会」のありようは、つぎの結論を導く。

「個性」「社会性」という概念は、そもそも一つの種に属する個体が振舞うさま（個体の行動）を論理的にとらえたものであって、もともと個体には備わっていなかったものが何らかの時点（おそらくは他者との関係性）において出来上がってくるようなものではない、と私は考えている。「個性」は一つの種に属する個体自体が本来的に有する性質（個性）であり、それらが他者との相互関係において複数の個体間あるいは種全体に共有されるとき、「個性」は「社会性」として概念化された生態的特徴として立ち現れるのであって、急に「社会性」と称する何者かが生ずるようなものではない。したがって「社会性」とは個体のあり方そのものであるわけだが、同時に個体が他個体と関わり合うという関係のあり方としても理解しておく必要があるのだ。それではそのような社会的関係を取り結んでいる種個体の全体はどのように表現されるのだろうか。種の生活史的な特性としての種内関係（「社会性」）を理解するとともに、多種間の関係性として、あるいは、同所的もしくは異所的な種間関係（これもまた「社会性」である）を理解するために、私は種個体の生活上のあり方あるいは生き方の基礎に「共同性」という社会概念を据えておきたいと思うのである。

「社会性」という個体の振舞いのあり方から見える関係性を媒介として、「個性」に基礎づけられている個体は、他者との関係においてさまざまな応答をなし、その上に「共同性」を確立してきたのであるというのがここまでの結論である。

そのような考え方が、ベイトソンを知る以前から、すでに私の観察の基礎にあったのは、水原が考えた行動研究に必須の方法論的心構えとして、当該の「行動の個体発生を押さえる」ことと「系統発生の意味を吟味・検証」することを学んでいたからであったのではないだろうか。

付記

稿を閉じるにあたって、本論を作成する契機を与えていただいた生態学史談話会の諸氏はまた、水原の研究に対する向き合い方を一緒に学んできた仲間でもある。霊長類社会論の今後の展開を求めて、これからもともに学び続けたいと願う。

定年退職後のささやかな思索を取り扱った本稿の論集掲載を温かく了承してくださった名古屋学院大学総合研究所および同編集委員会の諸氏に、心よりの感謝を述べるものである。

文献

パウア, 岡本夏木他, 1984. 『赤ちゃんは内的言語をもって生まれてきます』 ミネルヴァ書房, Bower, T. G. R.,

- Concepts of development. Paper read at 21st International Congress of Psychology, Paris, 1976.
- 日高敏隆（訳），1970.『ソロモンの指輪』早川書房，Lorenz, The King Solomon's Ring, 1960.
- ，久保和彦（共訳），1970.『攻撃 悪の自然史 I II』みすず書房，Lorenz, Das Sogenannte Böse: zur Naturgeschichte der Aggression, Dr. G. Borotha-Schoeler Verlag, 1963.
- ，———（共訳），1974.『愛と憎しみ I II』みすず書房，Eibl-Eibesfeldt, Liebe und Hass: Zur Naturgeschichte elementarer Verhaltensweisen, R. Piper & Co. 1970.
- 今西錦司，1941.『生物の世界』弘文堂.
- ，1949.『生物社会の論理』毎日新聞社.
- 伊谷純一郎，1972.『霊長類の社会行動』生態学講座20 共立出版.
- 可児藤吉（口述），1943.『生態学ノート』（徳田御稔への個人講義）
（口述の資料化は徳田御稔によって行われ，1961年に公開された）
- 河合雅雄，1969.『ニホンザルの生態』河出書房新社.
- 木村光伸（訳），2010.『マキャベリアンのサル』青灯社，Maestripieri, Macahiavellian Intelligence: How Rhesus Macaques and Humans Have Conquered the World, The University of Chicago Press. 2007.
- ，2023.『サルはさよならを言わない—「共生社会」への視座』人間社.
- 水原洋城，1957.『日本ザル—この見事な社会構造』三一書房.
- ，1965.「高崎山におけるニホンザル自然社会のステータス構造—ステータス概念再検討のために—」『サル社会学的研究・今西錦司博士還暦記念論文集』中央公論社.
- ，1971.『サルの国の歴史』創元新書.
- ，1981.『ニホンザル行動論ノート』どうぶつ社.
- 佐藤良明（訳），1990.『精神の生態学』思索社，Bateson, Steps to an Ecology of Mind, Harper & row Pub. 1972.
- 高橋洋（訳），2020.『社会はどう進化するのか』亜紀書房，Wilson, This View of Life: Completing the Darwinian Revolution, Pantheon Books, 2019.
- 富永健一，2003.『社会学講義 人と社会の学』（中公新書）中央公論社.
- 渡辺宗孝・日高敏隆・宇野弘之（訳），1955.『動物のことば』みすず書房，Tinbergen, Social Behaviour in Animals, Methuen & Co. Ltd. 1953.